

献 辞

塩地洋教授は、2020年2月28日に65歳の誕生日を迎えられ、同年3月31日をもって本学を退職されることになりました。

塩地教授は、和歌山市でお生まれになり、和歌山県立桐蔭高等学校を卒業後、京都大学経済学部に入学されました。1982年3月に同経済学部経済学科を卒業、1984年3月に同大学大学院経済学研究科修士課程を修了、1987年3月に同博士後期課程にて研究指導認定を受けられました。1989年4月から九州産業大学商学部において講師・助教授を務められた後、1994年4月に京都大学大学院経済学研究科に助教授として着任され、その後、2002年に京都大学博士（経済学）を取得され、同年、教授に昇進されました。2016年4月から2017年3月までの本学大学院公共政策連携研究部教授併任期間を含めて、現代経済学講座の「現代日本産業論」担当教授として、長きにわたって本研究科における教育・研究に尽力してこられました。

塩地教授は、自動車産業の国際比較研究などの研究に傾注し、多大な研究業績を残してこの分野の理論・実証研究で指導的な立場に立ち、数多の後進を指導・育成されました。

博士学位論文となった単著書『自動車流通の国際比較』（2002年）は、フランチャイズ・システムの革新と限界を縦糸に、日本・米国・英国・韓国・中国の国際比較を横軸に、国内外での膨大な取材をベースに自動車流通システムを分析したものであり、生産面の研究に比べて立ち遅れていた自動車流通の研究水準を抜本的に引き上げるとともに、多国間の国際比較としても従来の産業研究の常識を大きく上回るものでした。同書は、「米国の流通システムが世界標準である」、「流通経路が多段階になると商品小売価格は高くなる」、などの通念を事実と論理にもとづいて否定し、流通研究に大きな一石を投じました。また、当時萌芽常態にあった中国の自動車流通や、自動車のインターネット販売についても論じるなど、最先端の現象に果敢に取り組み、理論的・実践的含意を提供しました。同書に対しては、日本商業学会から奨励賞が授与されています。

同書の刊行後、教授の研究対象は、自動車流通システムから、委託生産など自動車生産システム、中国・韓国および新興国自動車産業、東アジア産業論に及び、その成果は、単著書1冊、編著書・共編著書8冊を含む25冊の著書と約60本の論文に結実しています。

塩地教授の研究活動の特徴は第一に、何よりも産業の現場に貢献することを志向され、現場に学び、現場に還元するものであったことです。現場に学ぶという点では、記述資料の収集にとどまらず、内外の多数の現場を歩いて観察・聴き取りをおこないました。取材活動は2019年末までに79カ国、のべ約8,000カ所という途方もない数にのぼります。こうして得られた情報は、すぐれた実証研究者がひしめく自動車産業研究の分野にあってひときわ深く広いものであり、これに依拠して教授はオリジナルな知見を多数提起しました。前述のように経済学・経営学や実業界での通念が必ずしも正しくないことを鋭く訴えかけることもしばしばでした。

現場に還元するという点では、業界団体や関連官庁のプロジェクトや委託研究にもとづく報告書や各種の講演活動を通じて産業界や官界に対して学問成果にもとづく政策提言をおこなってきました。なかでも、自動車販売協会連合会流通問題研究部会長、経済産業省／日本自動車販売協会連合会乗用車市場成長戦略検討会議議長を長く務めておられます。学内では経済学研究科附属東アジア

経済研究センター主催のアジア自動車産業シンポジウムを2004年度から2019年度まで16年間連続で組織して多くのビジネスパーソンの関心を呼び、最大時には京都会場・東京会場の合計で約600名の参加者を得るほどでした。また、同センターの事業として産学連携のアジア中古車流通研究会を長年にわたって組織されました。

半面、こうして生み出された研究成果は著書・論文のほか各種学会でも積極的に発表され、高い評価を得てきました。そのことは、前述の受賞にあらわれているほか、アジア経営学会および産業学会で会長を歴任することにつながっています。

塩地教授の研究活動の第二の特徴は、日本の産業研究の最良の成果を海外に発信することに傾注されたことです。教授のような現場主義の記述的事例研究は、もともと日本の産業研究と隣接分野で独自に発展していたものであり、経済学・経営学の制度化にともなって欧米の研究において主流となっていくた、何らかの理論ディシプリンにもとづく仮説検証型の定量的研究との間で国際的な対話に支障をきたしかねない状況が生まれつつあります。しかし、塩地教授は機会をとらえて国際学会で精力的に発表と対話を重ね、現場観察にもとづく圧倒的な説得力によって、多くの海外研究者から一目置かれる存在となりました。36回の国際学会報告（内キーノートスピーチ2回）と31回の海外講演をこなす一方、中国において中日自動車産業研究交流会を2007年から2017年まで11回にわたって組織されたほか、2014年にGERPISA（自動車産業研究国際連合）第22回国際大会を、2019年にIFEAMA（International Federation of East Asian Management Associations、東アジア経営学会国際連合）第15回国際大会をそれぞれ誘致して京都大学で開催され、2019年にIFEAMA会長に選出されました。なお、国内の学会・研究会・講演会報告も317回に達しています。

第三に、塩地教授の研究活動は、以上のような産学連携・海外発信スタイルの研究を展開するうえで、多数の関連・後進の研究者を組織し、産業研究の底上げに貢献されたことです。毎年夏に実行する海外調査や海外の学会に中堅・若手の研究者を誘い、また前述のアジア自動車シンポジウムや日中自動車産業研究交流会、また多数の共著書出版プロジェクトを組織してこられました。こうして本研究科・学部学生のみならず、学外を含む多くの研究者を育成・指導してこられたことは特筆に値します。

そのほか、学内においては、2012年4月から2014年3月まで京都大学大学院経済学研究科附属東アジア経済研究センター長、2011年4月から2015年3月まで京都大学人権委員会委員を務めるなど、大学の運営にも尽力されました

京都大学経済学会は、塩地教授の多年にわたるご功績への敬意と学恩に対する感謝の気持ちを込めて、『経済論叢』の本号を塩地教授退職記念号として編集いたしました。教授のご指導を受けた方々や所縁のある方々から寄せられた論文を編んで、本号を教授に捧げることができるとは、私どものこの上ない喜びであります。

塩地先生が、今後とも、ますますご健康で、学界のため、また広く社会のためにご活躍なされますことを心からお祈りいたします。

2020年2月28日

京都大学大学院経済学研究科長 江上 雅彦